

この二つを合わせると、85%になる。つまり戦術で業績を良くするウェイトは15%しかないから、社長の戦略実力を高めることがいかに大事であるか分かる。

①と②の決め方のレベルが競争相手よりも高くなないと、業績は決して良くならない。

※あなたの地域戦略実力は、同業者100人中何番目になるだろうか？

そして、目標を効果的に達成する戦略実力は、100人中何番目に入ると思われるだろうか。

## 第4章 陶山訥庵の戦略

はじめに

業績を根本的に良くするには、競争力がある1位の商品を作るか1位の地域を作るなど、利益が直接発生するところで1位になることが欠かせない。このビデオは1位の地域作りについて説明している。

この前の3章では弱者の戦略に基づいた地域目標の決め方について説明してきた。地域目標が決まったあとは、どういう方法で1位になるか具体的なやり方が必要になる。これはとてもむずかしい。

これにとっても参考になるのが、長崎県の対馬で行われた猪全滅作戦である。この章では、陶山訥庵<sup>すやまとつあん</sup>の究極の地域戦略について説明することにした。

福岡の北西約100km、日本海の入口にある対馬は、二つの大きな島によって成り立ち、佐渡、奄美大島に次いで、日本で3番目に大きな島になっている。

南北は約82kmの細長い島で、山また山の島になっている。本島1.2万石、飛地の鳥栖市1.2万石、合計2.4万石の小藩であった。

対馬の本島には、約2万人がいた。大昔から猪が住みつき8万頭もいて農作物を荒していた。4対1の圧倒態勢で攻めてくる。これでは人間の勝ち目はない。



対馬には800丁の鉄砲があったので、秋の取入が終わると、各村々はそれぞれ思い思いに猪狩りをしていた。

これで猪が少しは少なくなるが、春に子供が生まれるので、秋になると再び4対1の力で農地を荒しに来る。これでは人間に勝ち目はない。

農民は田や畑に見張小屋を建て、一日中鐘や太鼓で脅していたが、油断するとごっそりやられる。

猪は結構頭が良い動物であるから、人間の行動パターンをすぐにおぼえるので防衛がむずかしい。

対馬はもともと貧しい地域であったので、猪の害で多くの死者が出ていた。こうなると出て来るのが占いと祈祷である。まず出てきたのが特別祈願のお札であった。これが飛ぶように売れた。猪は字が読めない。

次は山伏の特別な祈祷であったが、これも全く効き目がなかった。過去数百年来、いろんな人が対策を考えたがどれもうまくいかなかった。結局猪の害は「対馬の宿命」とみんなあきらめていた。

(注)これは確率戦になるので、強者の戦略になる。兵力数が4分の1と、少ない人間側が強者の戦略を実行したのでうまくいかなかった。

<sup>すやま</sup>陶山五一郎、成人して庄衛門に改め、53歳で隠居し<sup>とつあん</sup>訥庵と改む。74歳没。1657年11月28日~1732年6月24日没

訥庵は11歳(小5)のとき江戸に出て、加賀藩かかえの儒学者、木下順庵の門下生となり、16歳迄勉強した。600人中トップクラスになるという秀才であった。

24歳のときに家を継いだ。藩からもらった禄高は100石であった。43歳のとき大抜擢されて、郡奉行になった。

郡奉行になると16歳(高1)の時から考えていた、猪全滅作戦を提案。

時は元禄13年で綱吉の時代。1700年。全員の猛反対を受けたので、猪全滅を猪追い詰めと改めてなんとか承諾を受けた。

17:44

。思い思いに村ごとで狩り → 全島で1700

思...思...で狩りにしている上に祈り。  
\* 思...思...に猪を狩りにして、猪が一旦去って  
11か、又、やると → (自分の思...あはる、とる)  
た、マ、